平成30年度 第89回東京支部総会　講師は藝大卒和楽器奏者たち！！

さわやかな風薫る5月20日（日）花岡校長先生、恩師の溝口先生、齋藤先生、寺田同窓会新会長、下平副会長、知久副会長、岡本常任理事、谷口関西京都支部長の皆様をお迎えし、平成30年度第89回総会が開催されました。

講師には、藝大出身の若手和楽器奏者5名にお越しいただきました。黒紋付にはかま姿のりりしい男性に混じって、ピンクの訪問着姿の女性が一段と映えていました。

「互」の輝き「和」の響きー和楽器演奏集団「互ーtagai」によるー演奏会は、舞台でお2人が演奏し、お面をかぶった方が会場を回って、「狐の嫁入り」から始まりました。1時間30分の長丁場でしたが、MCを担当した津軽三味線の山下さんの軽快な運びで、拍手喝采でした。最後にプロのアナウンサーの関口さん（風32回）のタイミングの良いインタビューもあり、盛り上がりました。アンコールは風越の校歌を演奏してくださり、皆さんとともに2番までを歌いました。そして最後のアンコール曲では、獅子舞が会場を回っての終了となりました。皆様から頂く「ひとことカード」では大絶賛の嵐でした。61通のご意見のうち49通が「互」の皆様への賛辞でした。 機会がありましたらぜひお聞きいただきたいと思います。

「互」の皆さんは私たちの公演のすぐあとで、シンガポールでも演奏会を開催されたそうですが、やはり大好評であったと、理事長さんからご連絡をいただきました。今後のご活躍が楽しみです。

今年の総会は男性が少なかったですが、風34回生の男性が本部の役員をやっておられる岡本さんのご友人で出てきてくださいました。なんと美術の市瀬幸助先生のご子息だそうで、面影がありました。

講演やコンサートは勿論ですが、美味しい食事も楽しみのひとつです。実行委員会・役員会では試食会を開催し、色々なメニューの中から皆様に美味しいといっていただけるよう吟味を重ねて、メニューが決定されています。

大勢の皆様と時間を共有しおしゃべりを楽しめる、時には,あれ～だれだっけかな～、〇〇な、などと飯田弁も飛び出す会場は楽しくにぎやかで華やかでもあります。

次年度、東京支部は90歳を迎えます。奇しくも実行委員会は男性の第1回生である、33回生の担当になります。90周年記念としてがんばりたいと思います。どうぞ皆様お誘いあわせておでかけください。

和楽器演奏集団「互」勢ぞろい

狐の嫁入り

50回生塩澤有輔さんの指揮で「信濃の国」の合唱

風越・校歌の作詞家 **“伊澤修二”先生**について

今年の総会では、藝大出身の和楽器奏者「互」の皆さんにお越しいただいて演奏をしていただきました。

大勢の皆様から拍手喝采でした。津軽三味線、お琴、尺八、和太鼓などの楽器を駆使しての素晴しい演奏でした。MCをされた津軽三味線の山下さんは初めの導入部で、風越高校とわれわれ藝大とのつながりは、校歌の作詞者である伊澤修二先生が藝大初代校長であったこと、と話されました。

平成11年発行東京支部だより19号の「ご存知ですか？」には以下のようなことが書かれています。

校歌が初めて歌われたのは、明治44年2月11日でした。 作詞の伊澤先生は明治8年米国に派遣されて音楽を学び、わが国に西洋音楽を紹介し、音楽文化の発展に貢献されました。作曲の小山作之助先生は、「夏は来ぬ」などの作曲で知られています。当時の波多市松校長に送られてきた小山先生からの手紙では、「貴校校歌作曲の儀、遅延に相成、誠に御気の毒に存候、漸く別紙の通り脱稿いたし、昨夜伊澤先生の清聴を煩わし御満足の旨承り候・・・・・校歌の事ゆえ、品格を重んじ、それに強みと趣きとを含め候へ共、全校生徒の合唱に適せしむべく平易に作製いたし候・・・・・」と作曲にご苦労をされた様子が伺われます。

当時一流の先生方によるこの校歌は、温雅で気品高く、今にいたるまで多くの卒業生の胸をあつくさせ、感激をよび起こし、「姫百合の薫りを、千代に傳え」てきたのです。

その伊澤先生のこと、校歌のことを、昭和63年風越高校同窓会支部だより第8号に元会長の村井悦子先生が書かれていますのでここにご紹介いたします。

校歌に誇りを　　高女29回　村井　悦子

♪　赤石山の峯たかく　　天竜川の水清し‥♪♪・・・

創立以来80有余年歌い継がれてきた、風越の校歌は、作詞伊澤修二、作曲小山作之助、伴奏譜下総皖一となっています。そのそうそうたる顔ぶれに驚かれた方は少なくないと思います。

伊澤修二先生は高遠出身、東京音楽学校（現藝大）の初代校長で紀元節（建国記念日）の作曲者。小山作之助先生は同校教授で勅語奉答歌の作曲者です。（以前には元日、紀元節、天長節などは国の祝祭日といわれその日は礼服で先生生徒が学校に出て式を行いましたが、その時に必ず歌われたのが、君が代とこの勅語奉答歌でした。）伴奏譜の下総皖一先生は同校教授で戦後、東京音楽学校と東京美術学校が合併されて東京藝術大学となって、学長は美術部と音楽部で交替に当る制度となった時、音楽部からの初代学長をされた方で和声学の大家。多分この様に日本に於ける第一人者の作詞作曲のものには、「それ相応の方の伴奏譜を。」ということで、戦後になって下総先生に依頼されたものと思います。戦前には伴奏譜はなく音楽教師が和声学に則って自分でつけていました。

時代の変遷と共に歌詞に多少のずれが出ていますが、曲は簡素にして品があり、さすが大家の作の校歌といえます。

又、毎年市立の校歌として歌われています追手町小学校のは、浅井洌作詞、福井直秋作曲となっていますが、前者は「信濃の国」の作詞者。後者は武蔵野音楽学校の創立者であり、初代校長だった方です。

こうして見ると、飯田の町は昔から文化水準の高い町だったといえましょう。

風越高校同窓会東京支部　役員会